



人文地理学

武山政直
松原彰子 編著
杉浦章介
河端瑞貴
花島誠人

目次

序章	人文地理学の伝統ともの見方	1
		杉浦章介・武山政直
第1節	地表を見る眼	1
第2節	体系的地理学と地域地理学	3
第3節	人文地理学のもの見方	6
	3-1 フィールドワークと地図	6
	3-2 地図と地理学的想像力	8
	3-3 概念的道具と関連分野	9
第4節	本書の構成	11

第I部 「人間・環境系」とその揺らぎ

第1章	自然・環境・人間	16
		杉浦章介
第1節	地理学の不変のテーマ：自然と人間	16
	1-1 環境決定論	17
	1-2 環境可能論	17
	1-3 決定論と可能論に共通する前提	18
第2節	「人間・環境系」とその揺らぎ	19
	2-1 量的な揺らぎ：地球温暖化現象	19
	2-2 質的な揺らぎ：水質汚染	20
第3節	地球環境と持続可能性 (Sustainability)	21
	3-1 持続可能な開発への取り組み	21
	3-2 地球温暖化への取り組みとパリ協定	24
第4節	グローバル・コモンズとしての海	25
	4-1 共有地の悲劇	25
	4-2 海は悲劇へと向かっているのか	26

第2章 地球環境と人間——気候変化と自然災害を中心に—— 32 松原彰子

- 第1節 地球環境の歴史 32
 - 1-1 自然環境と人間との関わり 32
 - 1-2 地球規模の気候変化と海面変化 32
- 第2節 地球温暖化 34
 - 2-1 温暖化の実態と原因 34
 - 2-2 温暖化対策 37
- 第3節 水害 37
 - 3-1 水害の実態 37
 - 3-2 河川と人間との関わり 38
 - 3-3 日本における明治以降の水害 38
 - 3-4 水害ハザードマップ 40
- 第4節 火山災害 41
 - 4-1 世界の火山災害 41
 - 4-2 日本における火山災害 42
 - 4-3 火山ハザードマップ 44

第Ⅱ部 「空間」と「場所」から見た地理的世界

第3章 空間の分析と場所の解説 —— 48 杉浦章介

- 第1節 容器としての空間、関係としての空間 48
 - 1-1 絶対空間 49
 - 1-2 相対空間 49
- 第2節 トポスとしての場所 51
 - 2-1 主体を問う 51
 - 2-2 トポフィリア 51
- 第3節 場所の力 (The Power of Place) 53
 - 3-1 場所の感覚 53
 - 3-2 名もない人々の歴史と、場所の感覚 54
 - 3-3 「場所の力」の3例 56

第4章 立地と空間的相互作用 ————— 60
武山政直

- 第1節 経済活動の空間的モデル 60
- 第2節 産業立地の地理学 61
 - 2-1 農業的土地利用と空間構造 61
 - 2-2 工業生産と最適立地 63
 - 2-3 商業立地の階層性 66
- 第3節 地理的移動 69
 - 3-1 日常生活の移動 69
 - 3-2 時間による移動の制約 70
 - 3-3 長期的な人口移動 71
- 第4節 相互作用と拡散 72
 - 4-1 地理学における相互作用 72
 - 4-2 地域間のグラビティ 74
 - 4-3 相互作用のポテンシャル 75
 - 4-4 空間的拡散 76

第5章 地理的経験の主題化 ————— 80
杉浦章介

- 第1節 地域・景観・風土 80
 - 1-1 地理学の発祥 80
 - 1-2 地理学の主題化 81
- 第2節 日常景観と「人間のいる風景」 82
- 第3節 和辻哲郎の風土論 84
 - 3-1 人間学的考察 84
 - 3-2 和辻の三類型 86
- 第4節 風土論の現代的展開 88

第Ⅲ部 「空間情報」と人文地理学

第6章 地理情報システム(GIS)と地理的世界の探究 ————— 94
河端瑞貴

- 第1節 GISの発展 94
 - 1-1 地理情報システムと地理空間情報 94
 - 1-2 実世界のデジタル表現 96

	1-3 GISの開発と普及	98
	1-4 地理情報システムから地理情報科学へ	100
第2節	GISの活用	101
	2-1 地理空間情報の可視化	101
	2-2 地理空間情報の作成	104
	2-3 地理空間情報の分析	105
第3節	GISと地理的世界の探究	106

第7章 防災と地理空間情報 110

花島誠人

第1節	自然災害と人文地理学	110
	1-1 ハザードと災害	110
	1-2 ハザード情報とハザードマップ	111
	1-3 ハザード情報の意義	113
第2節	災害リスク	114
	2-1 災害リスクの概念	114
	2-2 リスク許容度	115
第3節	災害リスク・コミュニケーションと地理空間情報	116
	3-1 災害リスク・コミュニケーションとは	116
	3-2 災害リスク・コミュニケーションとハザード情報	117
	3-3 リスク・コミュニケーションにおける地理空間情報の役割	118
第4節	防災とレジリエンス	120
	4-1 防災の4フェーズ	120
	4-2 ハード防災とソフト防災	120
	4-3 レジリエンスの概念と意義	121
	4-4 レジリエンスと地理空間情報	123
第5節	日本の防災施策と地理空間情報	124
	5-1 災害対策基本法の成立と改正	124
	5-2 防災と科学技術イノベーション施策	127
第6節	災害情報の共有と地理空間情報	127
	6-1 危機管理のための必須情報 (EEI)	128
	6-2 共通状況図 (COP)	130
	6-3 日本の事例	130

索引 138

執筆者紹介 144

序章 人文地理学の伝統とものの見方

第1節 地表を見る眼

地理学とはいったいどのような学問か。また、その素養や教養は、歴史的にどのように形成され、いかに継承されて現在に至っているのでしょうか。このような疑問について考え、地理学の伝統を探究しようとするとき、最も大きな存在としてたち現れるのは、『フランス地理 (*Tableau de la Géographie de la France*)』(1903) や 『人文地理学原理 (*Principes de Géographie Humaine*)』(1922) (遺稿を、パリ大学の後継者となったエマニュエル・ドゥ・マルトンス [Emmanuel de Martonne; 1873-1955] によって編纂された) を著した地理学者ポール・ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュ (Paul Vidal de la Blache; 1845-1918) である。彼は、19世紀後半から20世紀初頭の時期におけるフランス地理学の中心的存在であっただけでなく、その業績は、それ以前の近代地理学と20世紀後半から現代に至る現代地理学を架橋するものとなった。つまり彼は、近代地理学の発展が至った到達点であり、また現代地理学が形作られてくる出発点であったといえる。

ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュは、人文地理学における分析の中心は、人間の諸活動と、それに直接影響を与える身近な環境 (*milieu*) との関係にあると指摘する。フランスでは、このような身近な自然環境の下に成り立っている比較的均質な小さな共同体を、**pays** (pays は同時に日本語における「ふるさと」や「くに」も意味する) と呼んだが、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシュは、この比較的小さなまとまりある「生産と生活の場」を要素として、より大きな地域がどのように構成されるのか、そして、それぞれの *pays* は、相互

に影響され関係づけられながら、どのように全体のまとまりをもつに至るのか、これらのことを明らかにすることが人文地理学をめざすところであると考へた。また、彼は人文地理学の研究を実現するために、「生活様式」(genre de vie) という概念を活用する。これは、それぞれに異なる環境に生きる人々が、与えられた自然的環境の中で繰り広げ、伝承してきた様々な制度や伝統、生活慣習や活動、さらにはその中で生み出し獲得してきた多様で豊かな技術などを総体として捉える概念である。そして、同じような環境の下にあっても、この生活様式が異なれば、環境のもっている意味は異なって受け取られ、その結果、異なる pays が形作られることとなる。つまり、ここから、身近な自然環境が人々の生活の有り様を決定するのではなく、生活様式が身近な自然環境が提供する様々な可能性の中からどの可能性を選択するかを決定するという意味において、生活様式こそが pays そして地域の性格を特徴づけるという考え方が生まれてくる。

このような、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュの「地表を見る眼」は、20世紀後半、とりわけ1960年代以降の人文地理学の大きな変化にもかかわらず、フランス地理学の伝統の中だけではなく、広く世界の人文地理学者のものの見方に多大な影響を及ぼしている。「ヴィダルの学統」を継承するポール・クラヴァル (Paul Claval; 1932-) は、その著『地域地理学入門 (*Initiation à la Géographie Régionale*)』(1993) のなかで、「地表を見る眼」に2種類があることを、日常体験を例にして次のように説明する (Claval, 1998, pp.1-5)。

飛行機で旅行したことのある人なら誰でも経験するように、離陸直後の窓の外の景色は、飛行場の周りの工場や住宅、あるいは牧草地であり、しかもそれぞれの建物は一つ一つ識別され、道路を行き交う自動車の流れも1台ごとに見分けることできる。場合によっては、公園で遊ぶ子どもたちの姿すら見ることができる。しかし、瞬く間に高度を上げる旅客機からの地上の眺めは、狭い範囲に繰り広げられる個々の物体の姿や動きから、次第により広範囲に及ぶ風景へと変わってゆく。巡航高度とよばれる地上から1万メートルに達すると、同じ窓から見える眺めは、離陸直後の横からの水平的な眺めではなく、延々と続く森林や、その間に点在する農地、陽光を反射しながら緩やかに蛇行する河川、さらにはそうした自然の中を貫いて走る高速道路の白

い帯といったものへと変化する。この眺めは、上からの垂直的な眺めであるといえる。

クラヴァルによれば、人文地理学の中核をなす地域地理学は、この二つの眺め方、すなわち地上レベルにおける水平的な眺めと、空からの垂直的な眺めの両方を取り入れながら、地表に展開する個々の事象や具体的事物を相互に関連づけながら、より広範囲におけるまとまりある「全体」へと組み立てていくことを研究するものであるとされる。

20世紀初頭のヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュによる『フランス地理』における地誌研究から、現代に至る人文地理学の基本的アプローチの一つは、このような地表の一部分の詳細な観察と記述をもとに、より広域の全体（例えば国全体や国を越えた広域）の中に、地表の一部分で繰り広げられる人々の生活の有様を位置づけ関連づけ、**地域の分化**（違い）と**統合**（繋がりと纏まり）を明らかにする。このアプローチによれば、地表を構成するそれぞれの地域は、独自の「生活様式」を繰り広げることによって、他の地域とは異なっているが、それと同時に、様々な活動によって他の地域や、地域を集めた全体、例えば国土と関連づけられている。そして人文地理学の研究は、このような地域という「モザイク」の一つ一つから構成される、全体としての「モザイク画」の主題や構成、構造や意味を分析することにあるといえる。

第2節 体系的地理学と地域地理学

19世紀後半以降のドイツにおいても、フランスに劣らず地理学の伝統が揺るぎないものとなっていた。特に、地質学者であるとともに、地誌の大著『支那 (China)』を著したフェルディナンド・フォン・リヒトホーフエン (Ferdinand von Richthofen; 1833-1905) に影響を受けた、ハイデルベルク大学教授のアルフレート・ヘットナー (Alfred Hettner; 1859-1941) によって地誌の研究が推し進められることとなった。「地誌 (chographie)」という地理学研究の分野は、リヒトホーフエンによって初めて唱導され、ヘットナーによって方法論的に基礎づけられたものであった。ヘットナーは、その主著『地理学：その歴史・本質・方法 (Die Geographie: ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Metho-

den)』(1927)の中で、自然科学のような法則定立学と、人文学(文化学)のような個別記述学の間で地誌学を位置づけ、地誌研究によって自然地理学と人文地理学を総合化・統一化を行うことができると考えた。

このヘットナーに大きな影響を受けたのが、カント以来のドイツ地理学の哲学的方法論的伝統の流れを仔細に検討したアメリカの地理学者リチャード・ハーツション(Richard Hartshorne; 1899-1992)であった。ハーツションは、その著『地理学の本質(*The Nature of Geography*)』(1939)(邦訳題名は『地理学方法論])の中で、人文地理学の研究は、「地表全体を見ると何故地域ごとにその性格が異なっているのかについて、詳細で秩序だった、合理的な記述と解釈を行うことである」と述べている。そこから、ハーツションは、人文地理学を「域的差異性」(areal differentiation)の研究、あるいは「地域的差異性」(regional differentiation)の研究と特徴づける。この域的あるいは地域的差異性の研究が人文地理学の中心的課題となるというハーツションの考え方は、彼の『地理学の本質』の中に示されている地理学研究の概念図によって明らかになる。

図0-1は、ハーツションが域的(地域的)差異性を重視する理由を示すものであるが、そこには水平な板と垂直な板とが交錯する様子が記述されている。垂直な板は、様々な科学の分野を表し、そこには自然科学(気象学、土壌学、地質学など)、生物科学(植物学、動物学、人体生理学など)、そして社会科学(言語学、経済学、政治学、社会学など)の三大分野が並列に配置され、全体は「系統諸科学」(Systematic Sciences)と呼ばれている。

この垂直な板と直交するように水平的な板が交錯しているが、この水平的な板が地理学の領域である。地理学の研究はまず、垂直的な板によって表される系統諸科学と協働する地理学内の諸分野、すなわち、気象学と関係の深い気候学や、地質学と協働する地形学、経済地理学、政治地理学、社会地理学などの分野からなる「系統地理学」(Systematic Geography)によって形成される。これらの系統地理学の諸分野は、それぞれに対応する系統諸科学とともに、地域や国を越えて当てはまる一般的法則や規則性を探求する。ただし、系統地理学の各分野が明らかにすることを寄せ集めても、個々の具体的地域については一般的なこと以上には何も知ることはできない。そこで、こ

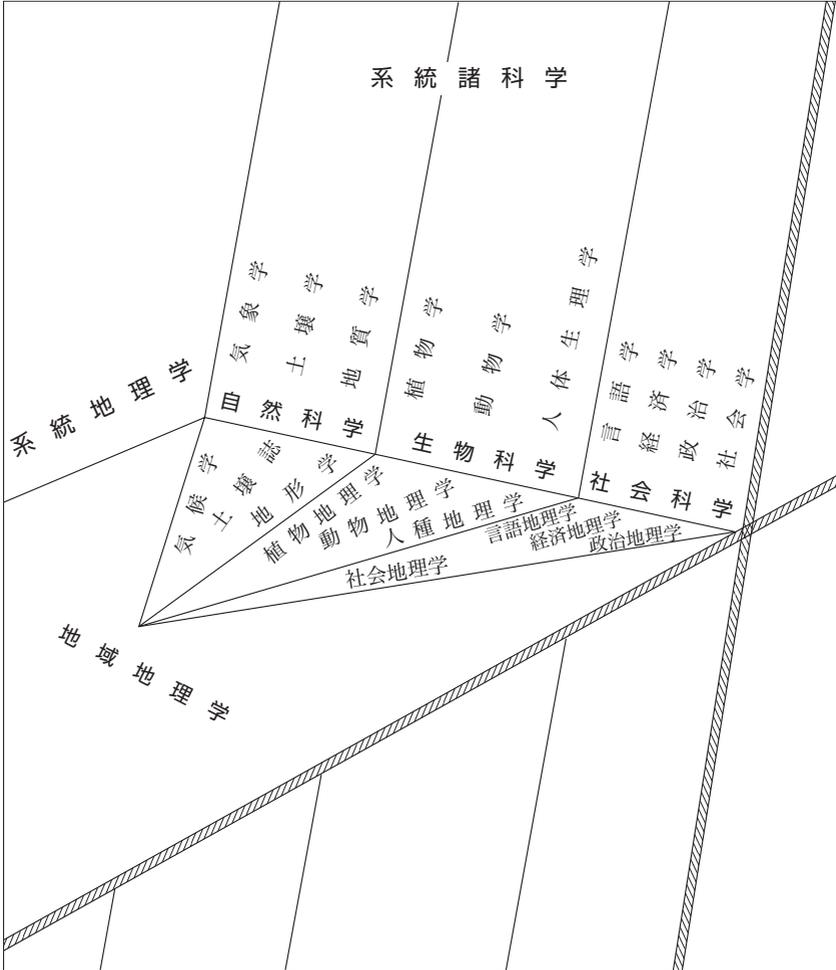


図 0-1 ハーツショーンの地理学の概念図

これらの系統科学の各分野や系統地理学の各アプローチからもたらされる知見を、「具体的な地域や場所に関して統合する科学」が必要になる。ハーツショーンは、地域についての系統科学の知見を統合し、個々の地域がなぜ別の地域とは異なっているのか、すなわち「域的ならびに地域的差異性を明らかにする学」としての地域地理学（Regional Geography）が必要であり、そ

のような地域地理学的研究こそが、他の体系的科学には存在しない、人文地理学独自の視点と方法を提供すると考えた。

1950年代になると、地域的差異性の記述を目的とする地域地理学は、それらの差異性を越えたパターンや構造を重視するアプローチからの大きな批判を受けることになるが、人文地理学の内部での哲学的論争や方法論をめぐる激しいやりとりにもかかわらず、個々の「場所」や「地域」の持っている個性や特性の記述の重要性はいささかも減じることはなかった。それは、太古の時代より人間が持ち続けている「未知の大地」(Terrae Incognitae)への関心や、他の地域への飽くなき知的好奇心を満足させるものだからである。場所的差異性や地域的差異性についての詳細な記述を目的とする立場の人文地理学を鋭く批判する側にあったイギリスの地理学者ピーター・ハゲット (Peter Haggett; 1933-) も、その著作であり、長らく英語圏の大学における標準的教科書となってきた『地理学：現代的総合 (Geography: A Modern Synthesis)』(1972)の第3部「地域モザイク」(Regional Mosaics)において、地域ごとに異なる文化はどのようにして生まれ、他の地域に伝播し、影響を及ぼすのかを論じている。また、ハゲットは自身の学問的自伝でもある『地理学者の技芸 (The Geographer's Art)』(1990, p.xvi)の中でこう述べている。「地理学者は、この世界の、あらゆるスケールやレベルにおいてみられる地域的多様性の中に潜むパターンや構造、そしてそれらのもっている意味を究明することに学問的関心をもっている」。

この地表上に観察される地域的多様性とは、地域的差異性に他ならない。たとえ地理学研究上の方法論において相容れぬものが存在していたとしても、地理的世界に見出されるこの多様性と差異性こそ、地理学的探求の原点であることをハゲットも認めているといえよう。

第3節 人文地理学のものの見方

3-1 フィールドワークと地図

人文地理学が「地域モザイク」を明らかにするために、ハーツションのように「合理的な記述や解釈を行い」、あるいは、ハゲットのように「地域的

多様性の中に潜むパターンや構造を（発見し）、それらの意味を究明する」としたら、どのような方法によってそれらの目的が実現できるのだろうか。

地表を観察するとき、水平的な眺めは、その対象である事物や事象に接近して克明に状況を捉えることができるが、その範囲は限定されている。より多くの事象や事物を観察しようとするれば、ちょうど展覧会の絵を順番に見て回るときのように、観察者は移動を繰り返し、一つ一つの対象を眺めていかなければならない。一方、少し小高い丘の上に登ると、町全体が見渡せるようになる。個々の建物、例えば寺院や教会、鉄道の駅舎や学校は、その一部しか眺めることができなくなってしまうが、これらの建物の位置関係や町全体の中の配置はよく分かるようになる。さらに飛行機やヘリコプターに乗って上空から眺めてみると、より広範囲の町の様子が眼下に現れ、町の外れやその向こう側に広々と展開する緑地や田畑まで手に取るように見えてくる。しかし、そこには個々の建物の形や装飾、町のざわめきや匂いは観る者の感覚には入ってこない。このような視点の移動は、水平的な眺めが、次第に垂直的な眺めへと転換されていることを表している。そして、クラヴァル (Claval, 1998, p.2) によれば、これらの二つの視点が統合されることによって、地域の理解が可能となる。

人文地理学では、水平的な眺めによって捉えられる対象に関しては、フィールドワークという観察と記録、問題発見と事実の確認（検証）の方法を重視する。人文地理学が、現場主義の「野外科学」であるといわれるのはこのためである。他方、垂直的眺めについては地図を利用するが、厳密な意味では、地図が表すものは垂直的眺めと同じものではない。飛行機からの垂直的眺めは、ある時点における、ある特定の窓から望まれるイメージであるが、地図の表現は、理論的には無数の視点からの垂直的眺めを合成して作られたものである。つまり、地図上のあらゆる点は、真上から見た垂直的眺めが再現されたもので、その世界からは遠近法が排除されているのである。また、地図は地球（球体）の一部分である地表を2次元平面に投影するため、地表の現実の姿を歪めることを避けられない。

そればかりではなく、地図は地表の厳密な意味での再現にはなっていない。地図は地表にあるすべてのものを表現するのではなく、地図の目的に照らし

て必要な事物や事象のみを選択して表現している。また、現実の地表には存在しない、等高線や市町村の境界を書き加えてもいる。さらに重要なのは、地図は一定の約束事に基づいて、情報を記号化して表現しているという点である。コード化された情報であるために、このコード化のルールを知らなければ、いったい何が表されているのかは不明のままである。このような地図の特性は、人文地理学だけではなく、地理学全体の基本的アプローチを形作りながら、地理学的ものの見方そのものを性格づけているといえる。地図という「媒体」(media)の発明が、地理学の誕生と関連づけられるのは、地理学のもの見方と地図との深い関係から生じている。またそれゆえに、現代においても、多くの人文地理学者が、地理学的研究の条件として地図の利用を挙げており、また地理学者としての職業的適性として、地図を利用し、地図を使って考えられることを挙げている (Sauer, 1956)。

3-2 地図と地理学的想像力

地図の「発明」は、古代文明にまで遡ることができるが、その時代には言うまでもなく、飛行機はもちろん、熱気球すら存在しなかった。それでは、どのようにして古代人は「垂直的眺め」を獲得できたのだろうか。

もちろん、近くに小高い山があれば、その山頂から地上を眺めることができ、その眺めは、地図的発想の出発点となったと推測される。日本の中世から近世へかけての「洛中洛外図」なども、高い塔からの眺めを参考にしたと考えられる。しかし、それよりもはるか以前の古代文明において、砂漠や海洋のただ中であって、古代人は地図の原型ともいえるものを既に創造していたのである。それは太古の夜空の星座を観測することによって得られた想像力の結果であるかもしれないし、あるいはまた、大海原の水平線の彼方に見え隠れする島影のイメージの一つ一つをつなぎ合わせることによって得られたものかもしれない。大事なことは、観察に基づきながら、それらの個々の事実を関連づける「想像力」によって地図が発明されたという点である。古代以来、現代に至る地図が、地理学的想像力 (geographical imagination) (Gregory, 1996) の産物であることは、地図の作成 (作図) や利用 (読図) が、何らかの解釈的行為によってのみ成り立つことを意味している。作図や読図 (地

図の解釈)は、機械的な作業ではない。それ自体が、経験と技術の習熟によってはじめて可能となる、想像力をもとにする、知的創造行為にほかならないのである。その意味で、地理学は想像力と創造力を養うものだということができる。

人文地理学のもの見方の第一は、地図を利用する際に、どのようにして地図に表された情報を解釈するのか、そのやり方、あるいはまた、地図という道具を使って、地表に関する情報や考えを表現し、伝達するというその仕方そのものの中にある。それゆえに、地域的モザイクの探求にあたっては、ハーツションの「合理的記述や解釈」であれ、ハゲットの「パターンや構造の発見とその意味の探求」であれ、**地図の利用**（地表事象に関する情報の獲得、蓄積、創造、伝達）なしには不可能なものといえる。技術の発展に伴って、空中写真（航空写真）の判読や、人工衛星からのイメージ画像、さらには、**地理情報システム（Geographic Information System: GIS）**などの研究領域が拡大しているが、地理的情報の解釈と活用という点では、古代バビロニアの地図の場合といささかも変わるものではない。

3-3 概念的道具と関連分野

人文地理学者による地域的モザイクの探求において、フィールドワークの技法や方法、地図の解釈や作図法は、いわば人文地理学におけるもの見方をかたち作る技術的側面や利用される技術的道具にあたるものである。しかし、フィールドワークであれ、地図の利用であれ、それらは人文地理学が明らかにしようとする地域的モザイクの探求の手段を構成するものに過ぎない。フィールドの現場でも、地図を広げて人文地理学的探求を行う際に、技術的道具とは別に、観察対象や地図情報の意味を探り、解釈する行為が必然的に行われることになる。この「**意味の探求**」という行為を促す道具が、**概念的道具**と呼ばれるものである。地理的情報に限らず、あらゆるデータや資料は、それ自体では何の意味をも生み出すことはできない。それらの情報が、何らかの**概念的枠組（conceptual frameworks）**に関連づけられてはじめて、情報を意味へと転ずることが可能となる。

人文地理学において、このような概念的道具の役割を果たす二つのものが

ある。第1は、人文地理学内でこれまでに展開されてきた様々な仮説群とその歴史である。人文地理学における学史や学説史、そして人文地理学の拠って立つ哲学や方法論的基礎に関する議論そのものが、こうした概念的枠組をかたち作る。

これに対して第2の概念的道具は、人文地理学の隣接分野における知見、学説、そして理論的枠組などである。近代地理学の成立と発展の歩みをたどると、様々な学問分野から影響を受けながら、今日に至っていることに気づかされる。人文地理学が自然地理学の中から分岐して独立してきたという事情を考えると、地質学、地形学、気象学、生物学や生態学などの自然科学の分野から多大な影響を受けて、独自のものの見方を形成してきたことは容易に想像できる。例えば、生物学における進化論から、その地理学の概念的枠組を形成したフリードリヒ・ラッツェル (Friedrich Ratzel; 1844-1904) の場合がこれにあたる。一方、19世紀後半になると、自然科学のみならず、人類学や社会学、そして経済学のような社会科学、あるいは哲学や歴史学、言語学や心理学などの人文科学の分野における概念的枠組をもとにしたり、あるいは触発されて人文地理学の概念的枠組を形成するような場合も現れるようになる。ここでは人文地理学と、関連する隣接科学諸分野との関係を鳥瞰しておくこととしよう。

図0-2は、ハゲット (1972および1990) が描いた隣接科学との関係を図式化した鳥瞰図である。人文地理学を中心にして、その周りに関係の深い専門分野が配置され、そこから順に、周辺部へと向かうにつれ、より基礎的分野にいたる相互関係のネットワークが描かれている。ここでは地理学一般が図示されているが、人文地理学と考えても同じである。この関連図には、人文地理学を支える三つの領域が表されている。それらは、生態系分析 (Ecological Analysis)、空間的組織 (Spatial Organization) の分析、そして地域的複合 (Regional Complex) の分析の3領域である。

第1の生態学的分析は、狭い意味での生態学だけではなく、地形、気候、植生などの自然科学的学問分野を含むものであり、いわば人間の諸活動にとっての自然環境についてのものである。これに対して、第2に空間的組織の分析は、経済学や立地論などと密接に関連する領域であり、その基礎には幾何

む方法について解説する。また、人文地理学の発展を促す GIS の新たな動向についても、その基本と応用について理解を促す。

「第Ⅰ部 『人間・環境系』とその揺らぎ」では、まず人間と自然環境との関わりについての人文地理学の基本的な捉え方を前提に、近年高まる人間・環境系のバランスの揺らぎへの認識を促す。また、その理解の土台となる自然地理学的視点として、気候変化や海面変化、地球温暖化、自然災害といった、グローバルに展開し、かつ日本にとって非常に関わりの深いトピックについて、人為的・社会的要因に触れながら論じる。

「第Ⅱ部 『空間』と『場所』から見た世界」では、絶対空間や相対空間として地理的事象を分析する科学的アプローチと、地理的な経験や感覚、場所の意味などに注目する人主義的アプローチについて、それぞれ見ていく。前者については、特に立地や空間的相互作用を対象とする空間モデルによる分析手法について、また後者については、景観論や風土論に焦点をあてて、異なる研究方法の特徴やそれらの意義を対比的かつ補完的に理解する。

「第Ⅲ部 『空間情報』と人文地理学」は、20世紀後半から急速に発展を遂げ、現在も進化を続ける GIS（地理情報技術および地理情報科学）の世界への導入を行う。同分野の基礎知識を踏まえ、その主な活用方法や、必要となる空間データの整備、さらに近年の普及動向について紹介する。また、GIS の社会課題への実践的応用として、防災における地理空間情報の活用効果や、その促進への政府の取り組みと政策的課題について、リスクやレジリエンスといったキーワードを紐解きながら解説する。

参考文献

Claval, P.(1993) *Initiation à la Géographie Régionale*. Nathan.

英語版は、Thompson, Ian 訳（1998）*An Introduction to Regional Geography*. Blackwell Publishers.

Gregory, D.(1994) *Geographical Imaginations*. Blackwell Publishers.

Haggett, P.(1972) *Geography: A Modern Synthesis*. Harper & Row.

Haggett, P.(1990) *The Geographer's Art*. Basil Blackwell.

Hartshorne, R.(1939) *The Nature of Geography: A Critical Survey of Current Thought in the Light of the Past*. Association of American Geographers.

ハーツホーン（野村正七訳）（1957）『地理学方法論——地理学の性格』朝倉書店。

Hettner, A. (1927) *Die Geographie: ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Breslau.

ヘットナー, A. (平川一臣ほか訳) (2001) 『地理学——歴史・本質・方法』古今書院.

Sauer, C. O. (1956) The education of a geographer. *Annals of the Association of American Geographers*, 46(3), 287-299.

Vidal de la Blache, P. (1903) *Tableau de la Géographie de la France*. Tome I, de Lavissee, Histoire de France.

Vidal de la Blache, P. (1922) *Principes de Géographie Humaine*. Armand Colin.

ブラーシュ (飯塚浩二ほか訳) (1940) 『人文地理学原理 〈上・下〉』岩波文庫 (改訳版: 1971年, 岩波文庫).